

富山大学人文学部同窓会会報

人文

No. 26

2004. 10. 1

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話(076)445-6143

FAX(076)445-6141

監字 大島文雄先生



ノイシュヴァンシュタイン城内ルートウィヒ二世の執務室

ルートウィヒ二世の建てたノイシュヴァンシュタイン城は、ミュンヘンの南方にあるロマンチック街道の終点のフェッセンにあり、白鳥のような優雅なたたずまいで、ドイツ観光のシンボルとなっている。

内装にも趣向を凝らし(写真)、ルートウィヒ二世が愛好したワーグナーのオペラの壁画で埋められた夢の城である。しかし、ルートウィヒ二世は三か月ほど滞在しただけで、まもなくシュタルンベルク湖で溺死する。王の衝撃的な死は、次々と詩や歌にとりあげられるが、いち早く小説化したのが囃外だった。

留学時代の体験を小説化した『舞姫』、『文づかひ』、『うたかたの記』のドイツ三部作の内、ルートウィヒ二世が登場するのが『うたかたの記』である。溺死は、孤独な王の内面に燃えていた狂気の恋の破綻による悲劇であったとするロマンチックな解釈のもとに小説化した。若き囃外の小説家としての飛躍を予感させる作品となっている。

人文学部教授 金子幸代

ご挨拶

富山大学のこれからと

人文学部同窓会

同窓会長 松平義麿



今年の夏のある日曜日、朝六時頃、車で富山大学前を通った。早朝とは言え、暑い日差しを浴びて、大学側の歩道上で除草やごみ拾いをしている人達の姿が目についた。

数日後、五福地区センターに電話したところ、当日の団体名は把握できなかったが、同地区の町内会や長寿会がこのようなボランティア活動を年に数回実施しているとのことであった。大学が地域の人達に愛され、そして支えられている姿を垣間見た思いがして嬉しかった。

本年四月からの法人化に続いて、明年十月からは県内三国立大学が再編・統合するという大改革が進められ、富山大学は今、

新しく生まれ変わろうとしている。

再編・統合後の名称は「富山大学」であり、八学部体制の中で人文学部も名称は変わらず継続される。

しかし、名は変わらなくても、その内容において、大学は大きく変容しなければならないのである。端的に言うならば、大学の機能である教育と研究の成果を従来以上に高めること、新たな機能としての地域（社会）への貢献を果たすことが要求されている。しかもそれらに効率性も強く求められるようになったのである。

このような時代の要請に対して、富山大学では比較的早くから対応が進められている。

平成三年度から「夢大学 in TOYAMA」が中・高校生対象の大学開放事業として始められ、平成九年度から「親子フェスティバル」が小学生とその親

たちを対象に地域開放事業として行われた。

大学近くの呉羽に住んでいる私は、これらにそれぞれ二回は参加・見学している。「親子フェス」の方には孫を連れて行って見たら、彼は大変喜んで積極的に参加してくれた。今年は彼の方から「行こう」と言うのではと思っている。

また大学広報誌の季刊トムズマガジンは平成十三年春に創刊され、今夏で十四号を数えている。その他、地域共同研究センターや公開講座、サテライト事業などの数々が、積極的に推進されていることはとても頼もしい限りである。

同窓会員としては大学の今後に大きな関心を持つとともに、その躍進を願って止まないのがあるが、どんなことが出来るだろうか。またすべきだろうか。一人一人としては、少なくとも大学の実態に注目し、建設的な提言を寄せることは出来るのではないだろうか。

会員の力を結集すると更に何かが出来るのである。皆さんから積極的なご意見をいただき、新たな大学を応援し、本会活動の充実に努めたいと思う。



トムズマガジンはインターネットでもご覧いただけます。
<http://www.toyama-u.ac.jp/jp/>

新・富山大学の学部学科構成

学部・学科		入学定員	
人文学部	人文学科	185	
人間発達科学部 (教育学部を改組)	発達教育学科	80	
	人間環境システム学科	90	
	計	170	
経済学部	昼間主コース	経済学科	135
		経営学科	115
		経営法学科	95
	夜間主コース	経済学科	20
		経営学科	20
		経営法学科	20
	計	405	
理学部	数学科	50	
	物理学科	40	
	化学科	35	
	生物学科	35	
	地球科学科	40	
	生物圏環境科学科	30	
	計	230	
工学部	電気電子システム工学科	88	
	知能情報工学科	78	
	機械知能システム工学科	88	
	物質生命システム工学科	151	
	計	405	
医学部	医学科	90	
	看護学科	60	
	計	150	
薬学部	薬科学科	105	
芸術文化学部 (新設)	芸術文化学科	115	
総合計		1,765	

重腰記

富山大学名誉教授吉田 清



文芸同人誌「悪人」の終刊記念パーティ (右から三人目。平成16年6月)

平成十四年五月三十日、私は軽い脳出血のため入院した。この病名はもちろん後で知ったものである。

実はその一年ほど前から、歩行時によるめくような感覚があつて気にならなくなかつたが、これを危険信号とは受け取らず、ことさら掘りおこして問題にすることから逃避していた。

それにもかかわらず、尚もこの感覚への懸念が脳裏をかすめる時があると、かつて脊椎症をわずらつた時の激痛体験を想い起こし、あれに比べると、有るか無きかの微感覚など病的と言えたものではないと高をくくりに、自身の怯情を正当化した。

医学のイも識らず、健康管理に無頓着で自分の血圧さえも計つたためしのない私が、感覚的印象と記憶のみに基づいて試みた素人自己診断に従つて、よろめき感への懸念はいつとき鎮まつたが、再燃の火種を抱え込んだまま押さえられた、その場限りの一回的な糊塗にすぎなかつた。もしも現時点で誰かに体調を問われ、自分の健康を語り、それに対処してきた心情を告白する破目に陥ることがあるとすれば、思わずその人の口を衝いて出るのは、天恵に反する増上慢、不可解、小心、卑怯、怠慢など、一つとして肯定的なものはないだろう。

もうようそう。要するに私は、受診とそれに連なる一切が恐ろしかったのである。あのよろめき感覚は私を不安にはしたが、非常に微弱なこともあつてついつい無視してしまい、相変わらず、その正体を究めて、この不安から解放されるために動いてみる気もなかつた。しかし体内で目下進行中と思われる病変は一瞬も止まることなく進みつづけていたのだろうか。だからそれは、私がしばしば陥る妄想の中では、煮えきらない私の躊躇であれ、思惑であれ一切が無縁の空無にすぎないので、私の存在そのものまで有無も言わず粉砕して疾過し、たちまち消えてしまう怪奇な妖怪となつて現われた。



五月が終わりへ近づくにつれ、よろめき感覚は次第に強く、身体バランスが取りにくくなつて、足を運ぶにも注意が必要になつてきた。これは恐らく脳内の異変による症状だろうと察しはしたが、不思議と痛みがない。私の受診をめぐつて心中幾度となく繰り返された自問自答とその結果など有りもしなかつたことのように霧消して、思い返されることもなく、ただ病院に赴いて診察を受けるまでの手順に思いを巡らすことに余念がない。無痛なので受診は明日にし、それまで身辺の雑事を大至急処理しなければならぬ。

五月三十日朝、私は神仏に詣で、父と妻の遺影に報告して外に出た。

研究 人文地理学

から コース

教授 浜谷 正人

卒業(修了)生の皆さん、お元気ですか。浜谷です。まだ!とお思ひの向きもあらうが、定年まで後三年半です。一九七七年のコース創設以来

君は大阪市立大学、教養部から移籍された溝口先生は名古屋大学へ、とそれぞれキャリア・アップ、丹羽君は故あつて独立研究者へと転進。浜谷のみが、一九八三年以来、二十年余も重席を汚している次第。現在には助教の大西宏治君と二人でコースの運営に当たっています。

ほぼ四半世紀を経て、卒業生は二百十名余りに達しました。この間、当該コースに直接かかわった教員も次々と新天地に転じていかれました。コース創設当時の木下先生は國學院大學(現独立研究者)、神前君は大阪外語大学、水内

コース創設時に木下先生が確立された慣例の多く、例えば四泊五日程度の県外への巡検(写真参照、写真の後景は那智滝、二〇〇二年十一月、浜谷写真)、卒業(修了)論文の発表会と県内一泊の予餞会など、今もほぼそのまま踏襲しています。演習や講読・実習も、授業形式はほとんど不変のまま。ただ、女子学生優位の、学部状況下にあつて、当コースでも女子学生が優勢となつて久しく、華やかさでは他コースに引けをとらないが、なぜか近年は専攻生が減少ぎみで、時には二、三名の学年もでるほど。小生が苦手とする女子学生誘致対策に腐心している昨今です。

知足の歳になつて

野尻 昭一 (17回会)

「懸崖わずかに草繩を借りて
通ず 溪暗くして奔流！」

江戸後期の儒学者市川寛斎が
越中と飛騨の国境にあつた籠の
渡しをたびたび訪れたという。

富山の南玄関「細入村」にウタ
インして三十年以上経つた。と
いうよりも、今となつては僅か
四年間だけ県外に住んでいたと
いった方が正しい。

学窓を巣立つて早三十五年、
卒業と同時に結婚し静岡県立高
校に奉職、故郷細入村の役場に
転職してこのかた、国文学とは
ほど遠い日々を送つてきた。自
分は何故富大に入り、国文学を専
攻したのだろうと思ひ起こして
みても、未だ明確なものがない。

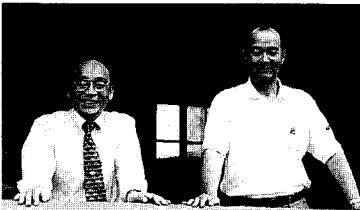
自分の大学生生活は、受験の垢落
としに終始しただけで、決して
真摯な学究の徒ではなかった。

昭和四十四年当時は、折からの
大学紛争、文学部無期限ストラ
イキで、卒業という実感もない
ままノンポリ学生を終えたので
ある。大学の成果といえは、世
路の坂を

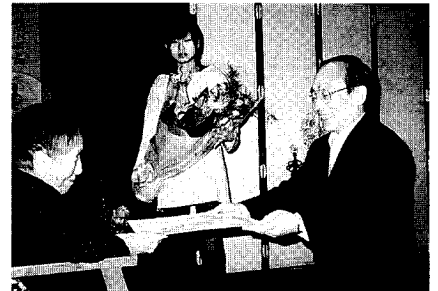
の中には自分の知らないことが
余りにも多いこと、自分は何も
解っていないのだということに
気付いたことだろう。

確か昭和五十七年のことだつ
たと思う。細入村の総合計画策
定の任務を与えられ、久しぶり
に富大を訪れた。経済学部の方
に富大を訪れた。経済学部の教
授方に専門委員を依頼するため
である。既に文学部は人文
学部に変更されており、混乱の
うちに巣立つてしまつた故か、
懐かしさの反面異端者の感を覚
えずにはいらなかった。

その後、
四十代を
産業建設
課長と総
務課長と
して、村
役場ゆえ
の多忙に
埋没する
こと十二
年、五十
路の坂を



同期の宮田君(右)と
再会



百歳のお婆ちゃんにお祝い状贈呈

越えて収入役に任ぜられるよう
に至つた。この期にこれまでの
半生を再構築したいと自分なり
に充実した新境地を目指しては
いたが、如何せん前村長の急病
により昨年四月村長に立候補せ
ざるを得なくなつた。元来、政
治的意欲が全くない自分が、地
方分権・市町村合併の大変動期
にこの任にあたるのも運命、巡
り合わせというべきか。

盛者必衰、生者必滅の習いは、
国文の異端者といえども、不変
の人生訓として脳裏にとどめて
いる。

無位真人、足を知る。自分
の人生に不足を言うまい。
いづれ本気で古典に立ち戻つ
てみたいと思う。



研究室 文化人類学

教授 竹内 潔

卒業生のみなさまへ。文化
人類学コースは、一九七九年
に故和崎洋一さんと赤阪賢さ
ん(現京都府立大学)が着任
されて以来、四半世紀の歴史
を刻んできました。歴史の浅
い日本の文化人類学の専門教
育では「老舗」と言つてよい
でしょう。卒業生は数は二三
〇名となり、実習報告書も一
三号を数えるに至りました。

和崎さん以来の「人のこと
は人に学べ」という「現場主
義」の精神は、今のコースに
脈々と受け継がれています。

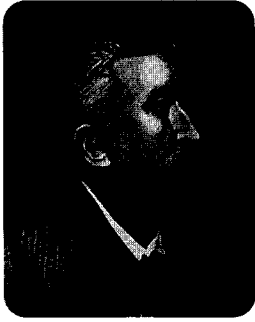
今年度の実習は魚津市でおこ
なっていますが、学生たちは
足繁く調査地に通つて、狭い
大学の中では学ぶことができ
ない地域の人々の生活を学ん
でいます(コースの最近の様
子についてはコースのホーム
ページをご覧ください)。

年輪を重ねてきた文化人類
学コースも、再来年の四月か



ら大コースに吸収されること
となりました。この五月末に
「リストラ対応のために小コ
ースを解消する」という学部
執行部案が示され、私や同じ
講座の教員は「コース間の協
力でリストラ対応は可能」と
強く異論を唱えましたが、発
案から二週間ほどの教授会で
現行コース制の解体が決定さ
れました。

様々な世代の卒業生の方々
が学生時代を懐かしんで訪ね
て来られますが、私どもの力
不足でコースを喪うことにな
った仕儀、卒業生のみなさま
にはまことに申し訳なく、深
くお詫びする次第です。コー
スが無くなつてもなんらかの
形でみなさまとの縁は繋げて
いきたいと願っています。



ラフカディオ・ハーン 没後100年に寄せて

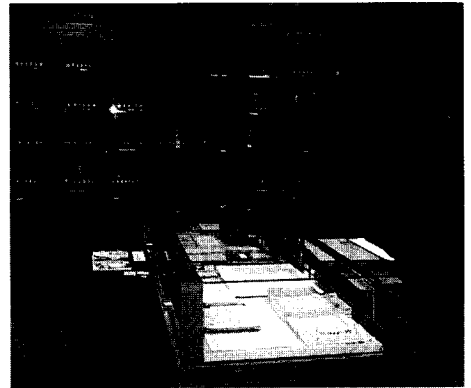
高成玲子 (25回英)

ずいぶん昔のことになるが、恩師の平田純先生を人文学部長室にお訪ねしたときのことである。先生がお見えになるのを待ちながら、物珍しさもあってあちこち見回しているうち、私が坐っているソファの左右に南日恒太郎先生と馬場はる刀自の胸像が置かれていることに気がついた。

私は無言でハルさんに話しかけた。「あなたは何故七年制の高等学校を富山に作ろうと考えたのですか。先代のご遺志ということですが、近代都市に核となる高等教育機関が必要だというのは、明治十一年の馬場家の持ち船通久丸の遭難事故によって、様々な面で近代化の遅れを痛感したことが淵源となっているのでしょうか。それとも……」ハルさんは答えない。

今度は左の南日先生に向いて問いかける。「何故、ラフカディオ・ハーンのア蔵書をそうまでして富山に持ってきたかったのですか。」

令弟・田部隆次氏から話をうかがって、わずか一週間後には二四三五冊の書籍がすべて富山へ運ばれてしまっていたということは、大変なことです。マス



富山大学図書館ヘルン文庫

す、今所願未だ古人の萬一を遂げず、天窮を享くる或は將に之に過ぎんとす、歎くに堪ふべけんや」と書かれていたのを知り、はっとしました。もし富山に学校があれば、たとえ健康が十分でなくても、経済的に苦しくても、前途ある若者は学ぶことが出来る。あなたの気迫の背後に、その思いを感じたとき、ヘルンの蔵書にかけられるあなたの思いの一端を知った、と思いました。」

そのとき廊下に足音がして胸像のハルさん、南日先生と私の鼎談は終わった。

あの日から何年たっただろうか。今年はハーン没後百年ヘルン文庫請来八十年になる。ラフカディオ・ハーン没後百年記念事業富山実行委員会では秋の記念事業に向けて準備を進めているところである。どうかみなさまのお力添えを得て成功させたいと願っている次第である。「馬場ハル刀自」

北前船（当地ではバイ船と呼ぶ）の商いで財を成した岩瀬の回船問屋の女主人
「南日恒太郎先生」
富山大学の前身である旧制富山高次の初代校長

・ラフカディオ・ハーン没後百年記念事業富山実行委員会事務局局長
・「八雲会」事務局局長
・富山国際大学教授

ラフカディオ・ハーン 没後100年記念事業の概要

特別企画展

「ハーンとローエル」

会場：北日本新聞ギャラリー

期間：10月17日(日)～24日(日)

特別講演会

「小泉八雲の未来へのまなざし」

講師：小泉 凡（小泉八雲曾孫）

会場：北日本新聞ホール

期日：10月23日(土)

高瀬先生と私

梅本 公美子 (16回英)

一世代以上も前に入学した大学では、男子学生は学生服、女子学生はスーツで通学していましたが、高瀬重雄先生はこれぞ大学教授という雰囲気でした。一般教養で他学部の学生と、階段教室で未知の学問の入り口で、



奥様もご一緒に、先生(左端)の書斎で談話

その後、先生

のご自宅へ、月二回は訪問することになるとは。私は三十代の初めに建設会社で再就職し、広報紙を担当しました。七十歳にならねようとする先生のお宅へ、初めて伺った時、草深い山里の純和風のお宅を想像していたので、少々、驚きました。市街地の中の洋風建築で、壁面を書架がとり囲んでいました。

階段を上って

池崎 理恵子 (39回国)



一年半の教養部を経て、二年の後期から、専門課程がスタートした。希望の国語国文学コースに入ることで、毎日が新

爾来、約五年間、原稿をいたたくその度に、奥様が茶菓でもてなして下さいました。奥様も時には長く同席され、先生のお話を楽しんでいらつしやいました。日本の碩学が書斎で寛ぎ、学問、文化、世相と自在闊達に談論が広がるのを、緊張しながら拝聴しました。温厚な中に不合理なこと、理不尽なことに示される憤りには烈しさと迫力があり、ただ圧倒されていました。先生の警咳に接した私は幸せだったと、今、改めて思います。

鮮だった。丁度、語学文学科の新校舎が竣工した年だった。真新しい校舎は、気持ちよく私たちを迎え入れてくれた。なぜか、一日の大半を過ごした研究室ではなく、階段の踊り場から上に伸びる階段を見上げた時の光景が今も記憶に鮮明に残っている。卒業して一年後に、運良く教員採用試験に合格することができた。初めて赴任した学校は知的障害養護学校だった。毎日スカートをはいて「国語の先生」をするはずが、毎日ジャージを身につけての出勤となった。恥ずかしながら、障害にも、もちろん障害児教育についても知識はほとんどなかった。日々戸惑いと失敗の連続だった。特に自閉症の人々には戸惑いが大きかった。自閉症は、人と共感的な関係を築くことが難しい、うまくコミュニケーションがとれない、興味関心が限られ同じ行動を繰り返したり、わず

かな変化を受け入れられなかったりする、などの特徴を持つ発達障害である。周囲から理解を得るのが難しい障害でもある。私にとっても、周囲のとらえ方そのものが、自分とは違う人々との出会いは、まさに異文化交流で、驚きの毎日であった。そして、現在も私は、同じ養護学校に勤務している。自閉症の人々との異文化交流も少しだけ上手になった。秘訣は理解すること、理解する努力を続けることだったようだ。十数年のキャリアは伊達ではない、と言い切ればよいのだが、今も迷いながら、試行錯誤する日々は続いている。しかし、努力し続けていきたいと考えている。障害児教育に対する社会のニーズも大きく変わってきている。よりよい教育を求めて、及ばずながら努力する日々である。いつの間にか、学生時代に見上げた階段とは、別の階段を上っていたらしい。出勤前、鏡の中にはジャージ姿が板について自分がある。大学生生活を思い出す時、今に至るその後のめぐりあわせを、ふと不思議に思う。

追悼

我が恩師坂井誠一先生を偲んで

米原 寛 (14回史)

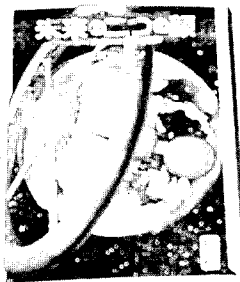
出会いの記憶

坂井先生との出会いは、昭和三十八年十月、富山大学文学部文学科の専門課程（歴史）に進んだ時であった。最初の印象は眼光鋭くいかめしい。大学の先生“そのものであった。先生から、まず史料講読と日本史概論の講義を受けた。後にして思えば、私が近世という時代を選んだきっかけは史料講読であったようである。

先生は「古文書は本から学ぶものではない、生の文書を五感で読むものだ。そして現地で読むものだ」と言うのが口癖であった。秋たけなわの十一月中旬、牛ヶ首用水文書を現地で見ると、我々講座専攻者を史料が管理されている牛ヶ首用水管理事務所に案内された。はさに干された稲穂の香りをかきながら現地に足を運んだ。最初は余り古文書には興味がなかったの

で、「昼飯に銀シャリを食べさせるところから」との坂井先生の誘惑まがいの言葉に、はしたなくハイキングのつもりで同道した。しかし、「生の古文書」に触れた時の気持ちは言いようのないものであった。「銀シャリ」は坂井先生特有のウィットに富んだ「策略」であった。が、この瞬間が私の「近世を学ぶ」という方向性を決めたのである。

著者 J・Pホーガンさん
訳者 星野之宣さん
(タイトルに拝借して申し訳ありません)



未来の二つの姿

—五十メートルの妄想—

西沢 志津子 (32回東洋史)

二月上旬のある日曜、まだ雪が残っているとはいえず、幸い晴れ上がったため、N・Sは自転車で買い物に出かけた。

「自転車は車両扱いで車道を走るべきなのか、だがスピードやら何やら考えるとやはり歩道なのか」と常日頃考えてはいるものの、車道の端に雪が積もっているのは歩道を使う方がよい。

その帰途、ペダルをこいでいたN・Sの目に何かが映った。百メートル程前方に黒っぽい大きな物体が道を塞いでいるのだ。

「何だろう、邪魔だな。」

近視と乱視で目が悪いとはいえず（眼鏡をかけてはいる）、それが何なのかすぐに解らなかつたのは視力のせいばかりではなかつた。というのも二、三メートルも走ると、物体の正体はやつと解つたのだが、それは—

「人間だ、人間が蹲っている、いや寝ている？」—N・Sは混乱した。状況が全く飲み込めないう。いくら天気良く、午後の

気温の高い時間とはいえ、まだ冬なのだ。何故こんな所に人が横たわっているのか、普段滅多に見えない、というよりN・Sにとっては初めての体験である。

「まさか、もしかして…!!」

N・Sが最悪の想像をしたのも無理はない。

お察しの通り「N・S」は私のこと。これは数年前に遭遇した小さな事件である。結局どうなったのか？異変に気付いた車が止まり救急車を要請、呼びかけても全く反応を示さぬ相手（男性）に、私も運転者も不安は募る。と突然起き上がると、「大丈夫」と言いつつ、飛び跳ねるように去って行った。後に残された二人は呆然と見送るだけ。

何が「未来の—」か？実は自転車で近づくわずか五十メートルの間に、私の頭の中では「九死に一生」などの番組がよぎり、「命の恩人」とか言われたらどうしよう、という浅ましきで一杯。小市民なのか、オバサン化現象の成せるワザなのか、現実はまだこんなものですね。ひとつ救いなのは、そんなことないさと思う理性がありつつ、想像していた点ですか。

総会のご案内

謹啓 秋涼の季節になりました。皆様にはご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も下記の要領にて総会・講演並びに懇親会を開催いたします。多数ご参加いただきたくご案内申し上げます。

敬白

人文学部同窓会長 松平 義磨
記

日時：11月20日(土)午後1時30分より

場所：ボルファートとやま

(富山市奥田新町81 TEL076-431-1113)

講師：金子幸代 教授 (比較文学研究室)
講演題：「鷗外のドイツ留学時代の探求」

鷗外は、ベルリン・ライプチヒ・ドレスデン・ミュンヘンの四都市に滞在して、軍陣医学と衛生学の研究に従事した。四都市の中でも最初のライプチヒは、ゲーテが学んだ大学都市として有名である。ここで鷗外は文学に開眼した。日本とは違い、ドイツ女性がボートを漕いだり、スケートをしたりと屋外で活発に行動する姿に接した驚きを日記に記している。とりわけ鷗外の女性解放論を考える時に忘れてならないのは、ドイツ女性解放運動との邂逅である。こうした鷗外のドイツ留学時代について考えたい。

懇親会：午後4時より

会費：6,000円(当日受付にてお納め下さい)

同封のはがき(現況通知・総会・懇親会出欠の回答)を11月5日(金)までに是非ご返送願います。

人文学部教官異動

転出

2004・3・31

イギリス言語文化

西村 隆 教授

大阪教育大学へ

2004・10・1

国際文化学科比較文学

跡上 史郎 助教授

熊本大学教育学部へ

平成十五年度総会

平成十五年十一月十五日(土)

「ボルファートとやま」で恒例の総会が開かれた。協議では、年



会費をめぐって活発な意見がかわされた。講演会は黒崎直人文学部教授が「最古の銅銭?」富本銭の謎を掘るで、考古学の新しい情報をまじえた興味深い内容がわかり易く解説され、その後懇親会では、四十人の参加者が楽しい語らいの時間をすごして盛会のうちに終了した。

「同窓会」
「同期の集いをする」
昨年(のこと)「還暦を迎えた三回同期生の集まりをやりたいがもう十月になってしまったし」と幹事は困惑していました。他方、同窓会出席の誘いを電話で聞いた頭のイイ学友が「同窓会に同期会をのつけば……!」二つが一つになる。新しい視点のこの「妙案」は即実行となり幹事は大喜び。日時も場所も会費もぜんぶ決まっています。連絡もすでに同窓会事務局から会報で九月に届けられているのだから

報 告

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

尾山 進司
(1回 英文)2002年12月30日
坂井 誠一
(教官 史学)2004年3月16日
高橋 泰生
(50回 考古学)2002年3月17日
東頭千恵子
(12回 国文)2003年4月

な雰囲気浸って学生時代を思い出に討議。講演は学内教授の研究に基づくもので、「!?」の意見と「久し振りにアカデミック」と。有難いこと。(梅本)

総会は「年会費について」活発に討議。講演は学内教授の研究に基づくもので、「!?」の意見と「久し振りにアカデミック」と。有難いこと。(梅本)



い出した」の喜びの声。

懇親会は、同時に在学したこのない年の離れた先輩と後輩との会話が弾み、「同窓のつながり」を感じる集いとなり、その後の同期だけの二次会も大いに盛り上がり、「妙案」の成果は予想以上でした。(十三回生記)

編集部から

○新しくかつ若い編集委員の参加は、「新生富山大学」と頃を同じくしているようで、心強い。(稲垣)
○新人が未知の方々と打ち解けて編集ができるのも、同窓という一本の強い絆があつてのこと。有難いこと。(梅本)
○昭和四四年、富山大学紛争の新聞報道のスクラップブック。手にしつづ、つい先頃であつたような感傷にひたる。(久保)
○編集に携わり、同期生の消息を知ったり、懐かしい方々にお会いしたりしました。(仙石)
○猛暑、残暑にめげず、今年も無事校了の日を迎えることが出来、ホッとしています。(山藤)
○加齢による体力の衰えと言え、歯の衰えもそのひとつ。編集に関っている間中、歯痛に悩まされ未だに治療中。鏡を見たくない日々です。(和田)